



(静岡)

遺跡は昭和三四年の土地

把握したほうがよい。

簡も小川城遺跡との関連で

だが、この道場田遺跡の木

簡、小川城遺跡の内堀よ

の際、小川城遺跡の分布調査

の際、昭和五四年の分布調査

遺跡が存在する。

館址として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

静岡・道場田遺跡

1 所在地 静岡県焼津市小川、道場田

2 調査期間 一九八二年(昭57)五月〜一九八三年(昭58)三月

3 発掘機関 焼津市埋蔵文化財調査事務所

4 調査担当者 原川 宏・山口和夫・丸山博信・大石佳弘

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 平安時代〜室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

道場田遺跡は、大井川水系によって形成された沖積平野上に位置している。付近には古墳時代の小深田遺跡・小深田西遺跡と中世居

館址として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

遺跡として知られる小川城

改良の工事の際、木枠の井戸と平安時代末の遺物の検出されたことから知られることとなったが、今回小川地区の区画整理事業が計画され、それに伴い発掘調査が実施されることとなった。便宜的に遺跡を五地点に分け調査をしたが、木簡が検出されたのは、第一地点、第二地点、第三地点からのもので、小川城遺跡の東側に当る地域である。

主な遺構としては、掘立柱建物の柱穴群、二〇を越す井戸、土壇、溝状遺構等がある。特に井戸については、変化に富み、石組、木枠、曲物等を組み合せて多様な形態で造られている。

一四点の木簡の出土状態は、(1)(2)(3)は井戸より出土し(2)(3)は同一井戸からである。(5)〜(9)は柱穴からの検出、(11)〜(14)は土壇からである。これらは五七年一月〜五八年一月以降六六確認され、道場田遺跡での木簡は合計二〇点となる。釈文は、奈良国立文化財研究所史料調査室の皆様、向坂鋼二氏、八木勝行氏の御教示をいただいた。

8 木簡の釈文・内容

- | | | |
|-----|---|--------------|
| (1) | 「 ☐ ☐ (梵字) 咄呶呶鬼地鎮鬼除☆」 | 218×30×2 011 |
| (2) | 「 ☐ ☐ 磨 _磨 ☐ ☐ ☆」 | 220×38×1 011 |
| (3) | 「 ☐ ☐ (梵字) ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 」 | 253×38×1 011 |
| (4) | ・「七難即滅 九九八十一」 | |

七福即生 八九七十二 肆



(280) × 43 × 7 019

(5) ・ × 日皆善一切宿皆賢諸佛皆威德羅漢皆行滿

□ 實言願我成吉祥 唵急如律令 (梵字)

・ × □ □ 吉祥無憂邊際離得諦故如風吹空一切無有

七難即滅 七福即生

(209) × 23 × 3 019



(131) × 33 × 6 051

(7) □ (11) × (8) × 3 081

(8) □ (18) × (3) × 3 081



(340) × 60 × 6 019



51 × (18) × 2 081

(11) ・ [蘇民將來子孫也]



87 × 21 × 5 032

(12) ・ [(梵字) 唵急如律令 (梵字)]



136 × 25 × 3 011



92 × 17 × 5 051

(14) ・ [志々山のこ〽々] (た) (つカ) (た)

卅

此内 □ □ こ □ □ □ (つカ) (た)

・ [正月 (花押)]

×

享祿二年 辛卯

(71) × 44 × 4 021

9 関係文献

焼津市教育委員会『小川地区遺跡分布調査概要』(一九七九年)

同『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報3』(一九八三年)

(原川 宏・山口和夫)